

假思想における無生法忍に就いて

山 本 啓 量

一

無生法忍 *anupatitika-dharmaksānti* は佛教認識論上における要機に立つものである。小乗の忍が生滅におけるに反し、無生法忍は不生不滅の認識に拘わるものである。原始佛教にあつては、認識の成立が根境識三事合して觸 *sparga* の施設 *prāṇāpī* あり、觸によつて、貪瞋癡の根本煩惱を生ずるが、此の觸の正觀によつて三毒の滅があるとせられ、觸が空に於ける施設なりとする觀方によつて觸施設が原始佛教の解脱への契機に立つている。又俱舍論賢聖品に「所緣念住は慧の所緣の諸法を以てなす、食と觸と名色と作意との集るが故に次の如く身受心法を集らしめ、其等の滅するが故に次の如く身受心法を滅せしむ」と云われるのは、觸に於ける集滅の正觀は慧によつて行われる事を示している。又同品に婆沙師が「念が慧を活らかしめる」と云うに對して論主は慧が念を住せしめるとして、慧を動的に見ており、更に慧及び諸

假思想における無生法忍に就いて (山 本)

の餘の心心所法は能行なりとし、次に智品には慧の中の忍と智 *jñāna* と見 *dṛṣṭi* を分別し、疑なく推度の性を智と云い、忍は所斷の疑未斷にして推度の性あり、見の性に攝せられ、見の推度尋及なると、疑なしとする智との中間に置かれ、忍は慧の能動性の中核をなしている。又成實論第一九八に智にして假名を破せば忍なりとし、俱舍論分別智品に「忍よく惑を斷するもの皆離と名く」「苦集を厭するを厭、離は苦集滅道の四に關連してよく斷ず」とあり、即ち忍は破又は厭と離と斷の否定的意味を持つている。所が婆沙論第六に「忍は亦得亦捨、忍の得とは加行に由る、捨とは界地を越ゆるに由る」と云い、得と捨とを同時に持つ中間的存在性の意義を附與しているが、大乘義章には「慧心安_レ法名_レ忍、於_レ境決斷智」と云い智度論勸學品には「能く信じ能く受し能く持するを忍と名く」と云い、忍の肯定的面を強調し、遍學品には「八人の若は智若は斷乃至辟支佛の若は智若は斷は菩薩の無生法忍なり」とし、無性法忍が否定と肯定の義を含み、忍が慧の能動

性を擔つて智の先端に立つことを示している。

原始佛教では、蘊・處・界・十二因縁・四諦に於て觸の如實知見を強調し、解脫への契機としている。然るに成實論第一九八に「始めて假名を破せば知、法位に入るを見。始めて觀するを知、達するを見」と云い、智度論遍學品には「初めて知るを知と名け、後に深く入るを見と名く。知は未了に名け、見は已了に名く」と云い、知と見とを分別するが、更に「定心を名けて見、定と未定とを通じて名けて知となす。轉法輪經に説くが如し、苦諦は知り已つて応に見るべく、知り已つて分別して見の法は応に見るべしと知るなり」と云い、苦諦の知見には未著手の可能性をはらんでいるが、道諦では「応に修すべきは道諦なり」とし、道諦には知と見とを含み、集諦の斷と滅諦の證とは、知見が定位に達する契機にあるものであり、「煩惱の斷を知るを名けて見と爲す」と云う時は、知が定位に到つた状態であつて證得へ結着したのである。然るに如實知見は、此の知見の一刹那に否定と肯定とを絶した「有りのまゝ」の意味をもつものである。無生法忍は原始佛教の觸における如實知見の認識における否定と肯定の兩面性を大乘の意味に於て繼承する。

緊那羅王所問經第四に「菩薩は善根を種えずして無生法忍を得ることがない。……乃ち四法を成就すれば無生法忍を得る」とし、(1)諸佛平等、諸法平等、世界平等、衆生平等(2)四

空（十八空）、大悲三解脱門、方便六波羅蜜、禪定及び五神通を翫樂す。(3)陰・界・入・一切諸法の性を知り菩提を集め菩提の性は陰乃至諸法の性なりと定んで疑なし。(4)一切の法を知つて實際如の中に住す、三世の法等しきを信ず、諸法平等を觀ず（虚空の如き性なる故に）を擧げてゐる。此の中(1)は攝大乘論に説き、(3)は原始佛教の觸考察を般若經が繼承するものであり、(2)(4)は般若經に於て強調開示するものである。

煩惱は對境に於て取著するによつて起る。甚深般若波羅蜜多は一切法に於て能染汚に非ず所染汚に非ざるが故に取なく著なし。（大般若行相品）「一切法無所有にして能著・所著・著處・著時不可得の故に名法は假の施設なり、一切法の名に著せず、法に著せず、想に著せず方便善巧に著せず」（同教誡教授品）又「一には自想、二には他想、三には施想なり、此の三輪に著して施を行ずるに由るが故に世間の布施波羅蜜多と名づく。……一には我は施者なりと執せず、二には彼は受者なりと執せず、三には施果に着せず之を三輪清淨となす」（同淨道品）と云い何れも取著を離れるに際して能所の對立を絶する事に留意している。「一切は虚空に等しく自性自相は皆畢竟空にして都て所有なしと達し、法の能生・所生・生處・生時を貴重するを生ずべきあるを見ざるなり。此に由るが故に生皆不可得なり……此の菩薩は無上菩提の作意を成就して大菩提心を遠離せず」（同不退轉品）として生滅の不可

得なるを四事對立によつて説くのみならず、四事對立を正觀し、作意成就に留意しているのは、俱舍論賢聖品の觸と作意とが身受心法の集滅の正觀を説くことと相応するものである。又修習に關しては「戒波羅蜜多を修する時、淨戒乃至般若を得ず、能修・所修・所爲を得ず、是の如き諸法を遠離せずして布施波羅蜜多を圓滿す（戒等略）」（成熟有情品）又妙慧を得、菩提を證得するについては、能得・所得・得處・得時の四事を分別し、本性空の中では一切有に非ずとし（不可動品）、一切法は皆畢竟空なれば、畢竟空中には法の能證・所證・證處・證時の由りて以て證すべきなし（眞如品）としている。蓋し證處證時は一切法依處なく、無依處を依處とし、三世平等であるからであるとせられる（求般若品）。又根裁品では、能證と所證とを分別し、能證の根と所證の栽培とが併行する根裁俱行を起さない事を、能所の不可得なるによつて強調するのである。

二

般若經が空を説く時、一般に十八空を擧げているが、能所の對立を否定する形式を取るものに無所得と畢竟空と本性空とを指摘する事が出来る。無所得とは所縁の境が無所有にして、能縁の側亦不可得であり、能所自性空なるが故に無所得というのである。大般若經聲聞不二品に「般若波羅蜜多を行

する者、行處、行時無所得なり、此の無所得の法も無所得なり」としている。即ち無所得は、無所有と不可得の能所の空關係について云うのみならず、此を方便として空を行する意味を持つものである。

諸功德相品に「此の中に於て誰か施し、誰か受け、施す物は何ぞ、何に由りて施し、何の爲に施し、云何にして施すや」とする時、諸法の自性は不可得であるとせられ、之を畢竟空と云われているが、之等の六事は施の目的を以て構成せられた施事實であつて、要は能所の對立維持にかゝるものであり、假和合に過ぎないものである。嚴淨佛土品にも「自性は都て不可得、唯和合の所作に執著あるのみ、自性皆畢竟空なりと審察すべし」とせられる。諸功德相品には「畢竟無際之二空を觀察し、二空に安住し、色等一切法は、夢乃至變化事の如く、實有に非ず」無性を以て自性と爲し、自相皆空なりと知るとも、善不善・有漏無漏・世間出世間・有爲無爲・聲聞獨覺・無上正等菩提を安立し雜亂することがないとし、智度論往生品には畢竟空の相を明かにし、「涅槃の際を眞とせば、世間の際も亦眞なり、涅槃と世間の別なし」と云つてゐる。即ち世間の際も壞して世間を捨てず、畢竟空を云うも涅槃と世間とを相即せしめ、對立の矛盾を統一せしめている。般若相品に般若波羅蜜多の清淨なる所以を明かにして、色等一切法が生なく滅なく染なく淨なき故清淨であるのは、色等が假

設にして不可説、不可得であり、畢竟空であるからであると
している。更に六波羅多を始めとする一切修習の法を與えず
捨てずとし、特に聲聞法を與えず異生法を捨てず乃至諸佛法
を與えず獨覺法を捨てずとして、不與不捨の畢竟空を説いて
いる。之は生滅等の法を對立せしめ否定と肯定を含む二重性
を取つたのである。此の畢竟空を説いて之を第二の轉法輪と
宣言し、此の理解を以て無生法忍とせられている。

本性空は本來の性質は空なりとして存在の根底に透察し究
竟に達することである。菩薩は之に基いて有情を證得せしめ
る。不可動品に「本性空の中には能得・所得・得處・得時一
切は有に非ざれば菩薩は安住して有情を證得せしむ」又「菩
薩は有情をして本性空の理に住せしむ、安住せしむと雖も、
二相なし、本性空は二無く二分無ければなり、無二法はその
中で二相を作すべきに非ざればなり」とあり。二とは有であ
り否定と肯定との對立であるが、無二は對立を超えることで
ある。更に精進般若を説く中で「菩薩摩訶薩方便善巧して菩
薩行を行じ有情を成熟す……應ずる所に隨つて漸次に安立し
或は預流果に住せしめ乃至或は無上正等菩提に住せしむ」と
あり、即ち性空の認識は否定と肯定を含むのである。又更に
勝義諦とは本性空にして、本性空は諸佛所證の無上菩提なり
とし、更に諸佛は本性空を以て佛眼となすとし、本性空の理
に安住して修行せば一切智智より退失せずとし、諸法の本性

空及び有情の本性空は最極寂靜にして増減・生滅・斷・染
淨・得果・現觀なしとしている。

無所得は、能所二縁が自性空なるを説き、又本性空はその
中に能所の對立なきを説き、畢竟空は、本性空を根據として
豫想すると共に、空の二重性によつて眞に至らしめる教施設
の空である。

三

無生法忍は不生不滅の理を知る事である。智度論發趣品に
「無生法忍とは生滅なき諸法實相の中に於て、信受し通達し
て無礙不退なり」と云つてゐる。而して不生不滅の眞の意義
は不生不滅にも取著しない所にある。此の事を論には二種の
無常、二種の無相等として二重否定を説くのである。即ち無
所得方便や畢竟空や本性空に於て、心沈沒せざる事が不退
轉なりとしているのは此の事情による。（曼殊室利品）

遍學品に「所有に非ず無所有に非ず、諸の戲論無き之を道
を得と名く」とし更に戲論の内容を明かして「色（等）の常
無常、苦樂、我非我、寂滅不寂滅を觀ぜは戲論となす、四諦
を見斷證修すべし、四禪等の定・三十七品・三解脱門・八脊
捨・九次第定・聲聞獨覺菩提を修すべし、菩薩の十地を具足す
べし、菩薩位に入るべし、佛土を淨むべし衆生を成熟すべし
佛の十力等を生ずべし、一切種智を得べし、一切煩惱の習を

斷すべしとせば戲論なり」としている。論は之に對して「性は因縁より生ずる故但假名のみあり、離性、無性は更に第三法の戲論すべきなし」即ち因縁所生の法は假名にして戲論すべきなしと云い、無戲論の般若波羅蜜多を行ずれば無生法忍を得て菩薩位に入るとし、「菩薩先づ柔順忍の中に住し無生無滅、亦非無生非無滅を學し、有見無見、非有非無見等を離れ、諸戲論を滅し無生忍を得る」とするが、四句に執する事を戲論とし、四句を離れる事が無生忍であるとしたのである。又「聲聞辟支佛は五衆の生滅を觀し心厭離して解脫を得んと欲す、菩薩は大福德の智慧を以て生滅を觀する時心に怖畏せず」とし、二地の智慧を超過する事を無生忍としている。

初發心の菩薩が無上菩提に至る時、その中間に於て不退轉を得ることが菩薩の要件である。大般若不退轉品に不退轉の菩薩の行・狀・相を説いて「如實に諸の異生地乃至如來地是の如き諸地諸法眞如の中に於て變異なく分別なく皆二なく二分なしと知らば……諸法眞如の中で分別するなし……如實に諸法眞如に悟入し已らば眞如と一切法と二無く別無しと聞くも疑滯なし……是の如き諸の行狀相を以て不退轉の菩薩なりと知る」とあり、即ち異生地乃至、如來地に於て眞如と一切法の不二を知つて疑滯なき事をその要件とし、「無生法忍を得て已によく諸法の實性に通達し、聞きて疑惑なく聞持陀羅尼門を得たる故忘失せざれば不退轉の行狀相と爲す」として

假思想における無生法忍に就いて（山 本）

いる。（曼殊室利分では心沈沒せず心驚怖せずんば、不退轉に住し、菩提に趣きて後退せずとあり）更に同品では色等一切法が自性なく對境が無所有であるから所住なく、從つて不退轉であり、無作無相無生の法性に隨つて住せば不退轉であり、十波羅蜜を修し空無相無願の法に住して不退轉であり、又善現品では無生定輪宏大にして此の定を見ず著せず此の定力によつて一切起るなければ不退轉なりと規定している、不可動品には「本性定理は亦法住と名づく、一切法都て無所住の故に法住と名づく、……菩薩この中に安住し、一切法の本性空なるを見て無上菩提に於て不退轉を得」としている。之を要するに、本性空を見て所住なく不退轉であるということである。かくして不退轉については、本性空の理に疑惑なく、本性空理を持して實際を證せず（善現品）二地に墮する無きを強調する。俱舍論第二十三に忍を説くに當り「忍とは無間業を作らず惡趣に墮せず畢竟不退を得て聖果を證す」とせられるが、大乘般若は二乗の果を證せず、二地に墮在せずとする。

聲聞、獨覺の法では三解脱門が涅槃への契機となつてゐるが、般若では之を戲論としながらも之を菩薩の菩提の中に攝している。「我學せん爲に諸法空なりと觀じ證せん爲に空なりと觀せず」（姉妹品）とし空・無相・無願に住せず三解脱門を引發すとも實際を證せずとし、習相應品では菩薩の三解脱門は無生忍を得て不退轉なりとし、不退轉品に「菩薩は異生

想に於て乃至如來想に於て退轉するが故に不退轉と名け、又二地に退墮せざるが故に不退轉と名く、自相空を以て一切法を觀じ、已に菩薩の正性離生に入り、少法も可得不可得を見ざるが故に造作するなく、從つて畢竟生ぜず、故に無生忍と名く」としている。即ち想は相によるものであり自相空と無作と共に大乘の、三解脱門を説き、之を無生忍としたのである。

四

無生法忍の準備狀態が忍に順するという意味で順忍と云われる。智度論遍學品に「先づ柔順忍の中に住し、無生無滅、亦非無生非無滅を受し、有見、無見、有無見、非有非無見を離れ、諸の戲論を滅し無生忍を得」としているが、戲論を四句の中に含めてゐる。同三漸次品に「有想に住するものは順忍なく、道なく果なく、現現なし。無想に住する者は、順忍なく十地なく、二乗を超ゆるなし。有想も無想も無ければ、修道あり。得果あり、道あり現觀あり」（同次第學品）とせられ有無の想なき順忍の能動性を示すものであり、修道あり得果ありと云うのは、智と斷とを同時に持つことでもあり、婆沙の亦捨亦得と相通じ、且つ又大乗の眞義を示すものである。同無生品には柔順忍觀は畢竟清淨ならず無生忍觀は畢竟清淨なりとし、同觀學品に「柔順忍と無生忍との中間のあらゆる法を頂となす」とあり（聲聞法の中の煖と忍の中間を頂とするが如く）頂を

得る者は到達し智慧あり安穩にして、頂の增長堅固なるを菩薩の位となし、一切の結使動搖せず、無生法忍と名けられる。法愛と云うのは柔順忍と無生忍との中間に於て、忍の增長するなく、畢竟空・不生不滅・法忍に於て愛著するを云う。之に反して大般若諸天子品に、說者と聽者と解者の三者を對立せしめ、此の中で説かれる一切法は、般若の中では不可得なり、幻の如しとし、一切の文字語言は不可得なりとしている。即ち「畢竟空・不生不滅・法忍」も不可得なりとせられる。此の事が堅固忍であつて、無説無聽無解の甚深般若波羅蜜多に住すべく、此の堅固忍によつて究意を得るのである。

無生忍は、道と果を持して無上菩提に至らしめる認識作用をなすものであつて、此の無生忍を中心に認識過程を考察し、智度論無生品には、或は三種或は五種の分別をしている。三種菩提とするものは順忍と無生忍と第三の菩提である。五種菩提は、發心・伏忍・明心・出到・無上菩提の五としいる。出到とは「般若波羅蜜の中で方便力を得るが故に、般若波羅蜜に著せず……無生法忍を得て三界を出で薩婆若に到る」とせられ、三菩提の中の第二と五菩提の中の第四とに無生法忍を配しているが無生法忍は無上菩提に至る契機に立つている。仁王般若上菩薩教化品に伏忍・信忍・順忍・無生忍（各々上中下の三種あり）寂滅忍（上下の二種あり）の菩薩の五忍を擧げている。その中で伏忍は地前三賢の觀解を修して煩惱を伏す

るのみ、信忍は隨順して疑わず、忍の體である慧が疑の反對概念の信として表われたもので、初二三地の菩薩に配せられ、順忍や無生法忍の先に立つ忍の要素である。順忍は四五六地に、無生忍は七八九地に配せられ、寂滅忍は上下二あり、佛と菩薩とが此の忍を用いて金剛三昧に入るとせられる。智度論遍學品に「菩薩は遍く諸道を學して、菩薩位に入り、未だ一切種智を得ずして先づ金剛三昧を生ず、此の時一念相應の慧を以て一切種智を得るなり」としている。金剛三昧は一切の結使を斷じ、寂滅忍による最後一刹那の契機に立つ定である。

婆沙や俱舍に於て見道の初位に正性離正に入るとせられるが、般若に於ては聲聞獨覺位を超えて菩薩位に入るとせられる性離正とせられる、正性離生は從つて無生法忍と相表裏する。遍學品に「菩薩摩訶薩初發意より六波羅蜜を行する時、智見を以て八地に入ること觀じ直に過ぐ」とあるのは菩薩位に入ることであり（同發趣品）、之は正性離生のことである。八人の智斷乃至辟支佛の智斷は菩薩の無生法忍である。從つて智を以て觀じて八地を過ぎ菩薩位に入るのは、道種智によるのであるから、無生法忍と正性離正と道種慧とは同位同列にあると云うべきである。

智度論三慧品に薩婆若は一切の聲聞辟支佛の智であり、道種智は菩薩の智であり、一切種智は諸佛の智なりとせられる。その中で薩婆若は内外十二入における無常苦空無我的總相の

智であつて、一切道と一切種智について知る能わず。道種智は菩薩は聲聞道辟支佛道菩薩道の一切道を知り、この道を以て衆生を度し實際の證をなさず。一切種智は一切法寂滅の相を知る佛智である。道種智は二地と佛との中間に於てある。世間福樂の十善道と三十七品の二乗の道と、六波羅蜜に即した三十七品は菩薩道であり、佛道は菩薩が自らの爲に人の爲にする道であるが、道種智は此等一切道を具足し衆生を教化し、其の道に出入するとも證を取る事がない。諸法實相は所謂る如・法性・實際を知る如實智の相である。如實知見が過程的なるに對して如實智は無明を絶した佛智の内容である。智度論初品十一智釋論に「如實智は十種の知る能わざる所を十智の各々の相・緣・別異、各々の有する觀法を知る。是の如實智の中には相なく緣なく諸の觀法を滅して亦觀すること有らず、十智の中には法眼と慧眼とあり、如實智の中には唯佛眼のみあり、十智は如實智の中に入れば本の名を失して唯一實智のみあり」とあり、即ち如實智は正知見の究極である。無性法忍は未具足の如實智であり、諸佛具足の如實智への過程にあり、佛眼に至るべき法眼の位にある。遍學品に菩薩の道種智を釋して「菩薩は無生法忍に住し、諸法實相を得、實相より起つて諸法の名相語言を取り、自らよく釋し衆生の爲に説いて開悟せしむ」とあり、所住の無生法忍は、教化の爲の教施設の作用に立つものと云うことが出来る。